

彙報

第三十七回国際アルタイ学金

岡田英弘

詳説国際アルタイ学金 (Permanent International Altaistic Conference' 通称P.I.A.C) の第三十七回国議は、一九九四年六月二十日(月)から二十四日(金)まで、フランスのシャンティイ (Chantilly) で開催された。

今回の会議の会長 (President) は、フランス中世史学の泰斗ジャン・リシャール (Jean Richard) で、アンステイティヨ・ヌ・フランス、アカデミー・デ・サンスクリプション会員であり、P.I.A.C書記長 (Secretary General) デニス・サイナー (Denis Sinor) イハティアナ大学名譽教授の旧友である。

鉄道のパリ北駅から急行列車で三十分足らずでシャンティイの駅に着き、駅からはタクシーで一キロメートルほどのところに、今回の会場のレ・フォンテーヌ (Les

Fontaines) がある。レ・フォンテーヌは、もとナタン・ド・ロッチャード (ロスチャイルド) 男爵の邸宅で、広大な五十ヘクタールの森林の敷地に建つ鉄骨造りの宮殿は、エッフェル塔で有名なアレクサンドル・ギュスターヴ・エッフェルの設計、一八七八年の建築である。第二次世界大戦後、イエズス会が取得して修道院としたが、修道士の減少

のため、一九七〇年以来、世界の宗教の交流のための文化センターとして、一般に開放している。

六月二十日、参加者はそれぞれレ・フォンテーヌに到着し、会費一千フラン (当時約四万円) を納めて宿泊した。今回の参加者は約八十名で、うち日本からの参加者は、岡田英弘、宮脇淳子、志茂穎敏、志茂智子、樋口康一、小山皓一郎の六名、いずれも夫妻同伴であった。日本以外では、ロシア連邦のカルムイク共和国からの参加者が多かつたのが目立つた。前年十二月に八十歳を迎えた、P.I.A.C創立者の一人ヴァルター・ハイシヒ (Walter Heissig) ポン大学名譽教授) も元気な姿を見せた。

その晩は七時半から地階の食堂 (Salle à manger) で歓迎晩餐会があった。これから毎食の食堂で摂る」とになると、献立は、朝食はパン、カフェ・オーレ、チーズ、昼食と夕食は料理二皿にバゲット、甘いデザート、チーズで、それにワインが付くというフランス式であった。晩餐

会が終わって、別棟のフォンターベル (Fontanberger) と二つ一室が開放され、冷蔵庫から皿田にワインを出して飲みながら歓談した。これも毎晩の恒例となつた。六月二十一日（火）は、午前九時から地図の講堂（Amphi）で、ルーアンの最重要行事である「ハムラニン・ハム（Confessions）」があつた。ソリではサイナー書記職の同僚のあふる参加者がそれぞれ、前回の参加以後の皿田の業績について報告し、初めての参加者は自己紹介を行つた。

昼食後、一時から研究発表（Paper reading）が始まり。これが三日間に発表された論文は、ヤグト五十二篇である。

第一セッションは「サハガニ・蘇瓦」 同僚 ドラベ・ハヤーリ・サルカ (Alice Sárközi)

岡田英弘（東京）：“Chinggis Khan's wise sayings: How old are they?” 「サハガニ・ケーハセニシテ—カウガニ クニ」

植浦淳子（東京）：“When did Inner and Outer Mongolia originate as geographical terms?” 「ミツクニ・ダス ルサカミノ地圖名起源はなつたか」 Jagchid, Sechin (Provo, Utah) : “Mongolia and the West” 「サハガニの西洋」

Michel, Heike (Berlin) : “The open-air sacrificial funeral of Mongolia” 「サハガニの風葬」

Aubin, Françoise (Jumelles) : “Popularization of the national past in Mongolian mass media during the post-communist years” 「共产党主義以後のサハガニの民族の民族の過去の通俗化」

Hamayon, Robertte (Nanterre) : “Chamanisme, bouddhisme, hérosisme épique: Quel support identitaire pour les Bouriates post-soviétiques?” 「...ト パス教、仏教、英雄叙事詩——ハセバヌト以後のトニヤー人」として何がトイナハトマトの支持となるか」

第二セッションは「カニカ」 同僚 ナクシトニル・カニカ・ルベキ (Edward Tryjarski)

Celnarová, Xénia (Bratislava) : “The evolution of poetry of Turkish folk poets” 「カニカの民族詩人の詩の発展」

Zamrazilova-Jakmyr, Jitka (Lund) : “Maintaining Turkish identity in Sweden” 「カニカー・ハドヌス パスヘト・ハト・カニカ」

Pilićkova, Sevim (Skopje) : “Les êtres surnaturels dans les contes populaires des turcs de la république de Macédoine” 「カニカー・リト共和国のトルコ人の民族のカニカの超自然的存在」

- Janabel, Jiger (Cambridge, Mass.): "Les rapports diplomatiques kazakh-russes (1534-1734)" 「カザフ＝ロシアの外交関係——1534-1734」
- Bassarak, Armin (Berlin): "Sur la grammaticalisation des catégories verbales en turc moderne" 「現代トルコ語の動詞の文法化」
- Khisamitdinova, Firzaus Gilmitdinovna (Ufa): "Mots de civilisation en bashkir" 「バシキル語の文明用語」
- Agyagázi, Klára (Debrecen): "The Chuvash verb-system as an object of modern linguistical investigations" 「チувァシ語の動詞系を対象とした現代言語学的研究」
- Kamei, Toshiro (水) 千遍 勝川 タシロ
Kamei, Toshiro (山) 山遍 勝川 タシロ
Kamei, Toshiro (水) 千遍 勝川 タシロ
Kamei, Toshiro (山) 山遍 勝川 タシロ
- Brentjes, Surchard (Berlin): "The early art of the Altai people" 「アルタイ人の古代美術」
- Marsh, Peter K. (Bloomington, Ind.): "When elephants roamed the steppe: A challenge to archaeological assumptions about the Mongolian paleolithic" 「蒙古の旧石器時代についての考古学者たちに対する挑戦」
- Wu Shu-hui 吳淑惠 (Montlake Terrace, Wash.): "The 老挝的常識と比較」
- Drompp, Michael R. (Memphis, Tenn.): "Oedipus and the Turks" 「オディッペスとトルコ人」
- Tongerloo, Alois van (Leuven): "Notices terminologiques sur le panthéon manichéen ouïgour" 「ウイグルのマニチケン神話の用語」
- Richard, Jean (Dijon): "Vêtement et marque de sujexion dans le monde des Mongols: Sur un passage de Simon de Saint-Quentin" 「モンゴル人の服飾と身分の記号——サンクエンティンの言葉」
- Schütt, Edmond (Budapest): "The evaluation of Prince Hayton's plan of a new crusade" 「ハイトン公の新十字軍計画の評価」
- Sinor, Denis (Bloomington, Ind.): "Montesquieu et le monde altaïque" 「モンtesキューとアル泰世界」
- Tryjarski, Edward (Warszawa): "Polish authorities on Saint Hyacinth's missionary activity among the Altaic peoples" 「聖ヒアシンスのアル泰民族に対する宣教活動」
- Di Cosmo, Nicola (Cambridge, Mass.): "Manchu and European colonialism: A comparative view" 「满洲人とヨーロッパの植民地主義——比較論」

imbalance of virtue and power in Qing frontier policy:

The Turfan campaign of 1731"「清朝の辺疆政策における
トルクートの不均衡——雍正九年のトルクート作戦」

Meserve, Ruth I. (Bloomington, Ind.): "White gold——
white plague: The cotton industry in Central Asia in

the 1930's"「白い黄金、白い災厄——1930年代の中
央アジアの木綿産業」

日食後、遠足 (Excursion) エクスカーション
でサンリス (Senlis) ル・チャーリー (Chauris) を訪れた。

サンリスはローマ時代の遺跡の上に、十世紀のフランク王
ユーグ・カペーが都を置いたといひ、美しい大聖堂があ
る。シャーリーには、古い修道院の跡に十九世紀の富豪が建
てた宮殿があり、未亡人の蒐集した東洋美術のコレクシ
ョンが展示してあつて、今ではアンスティチュ・ム・トラン

スの所有に帰してゐる。この遠足に時間を取られて、午後
のセッションは「語彙に分かれた急ぎ足のものとなつた。

第四セッションは第一部会「文化」 同会 ガトデイム・ノ
ハハナト (Vadim M. Solntsev)
Shcherbak, Aleksandr M. (St.-Petersburg): "Sur la ques-
tion de l'origine de l'écriture runique" 「スル・ラ・クセーブ
起源の問題」
Vasil'ev, Dmitrii D. (Moskva): "La corrélation des ver-

sions d'est et d'ouest de l'écriture des turcs anciens"

「中東への文字の東方剣と西方剣の相互関係」

Chan, Hok-lam 陳學霖 (Seattle, Wash.): "The distance
of a bowshot: Some remarks on measurement in the

Altaiic world" 「一箭の距離——アルタイ世界における量
距離測定」

Walravens, Hartmut (Berlin): "The Manchu anatomy"
「満洲語の解剖学書」

第四セッションは第一部会「語彙」 同会 クハヌ=タータ
ー・ヘーネンヒ (Hans-Peter Vietze)

樋口康一 (松山) : "Sartavaki badiri: A pseudo-
Sanskrit form in the Mongolian Ratnajali" 「カルタワ
キ・ズトバニ——ヤハカル語本『解縛経』に見る偽梵語
形」

Honey, David B. (Provo, Utah): "The Altaiic studies of
Peter A. Boedberg" 「ピーター・トマス・ボーデルグのトーハタ
ベ講」

Howell, Richard W. (Hawaii): "Blondie in Korea" 「韓国
のトロハト」

Corff, Oliver (Berlin) : "InfoSystem Mongolei: An
international-based journal on Mongolian affairs"
「トロハト・モルガル・モルガル」 ——モルガル事情に
起原の問題」

ハンガリ国族譜誌
Dácsy, Gyula (Bloomington, Ind.): "Hungarian surnames of Osmanic-Turkic origin" [トルコ人・モンゴル族の姓氏]

オロバ、ケマ (エリста) : "Oirat version of the Commentary of the Books of Tales" [『賢愚經註解』の木刻版]

第五章 ハラハ「歴史と文化」 同上 西田英弘
Gálk, Marián (Bratislava): "The first world culture between Rome and Chang'an" [ローマと長安の間の最初の世界文化]

Underdown, Michael (Canberra): "European knowledge of Korea during the Yuan dynasty" [元朝時代の高麗史料] トウヌーの元朝時代の高麗史料

ボルコ娃 (モスクワ) : "P. Piatetskyj: About his stay in Mongolia in 1874" [1874年モルガニヤーの旅]

オロバ、エレナ (モスクワ) : "Ethnogenesis and ethnic history of the Altaic peoples" [アルタイ人の民族形成と民族史]

Пустогачев, Яков А. (Горно-Алтайск): "Ethnogenesis and ethnic history of the Altaic peoples" [アルタイ人の民族形成と民族史]

Guchinova, Elsa-Bair (Elista): "Power in ethnocultural context: The president and his perception among Kalmyks" [カムチャク族の文化と力——大統領のカムチャク人の間の彼の認識]

サルコジ (ブルガリ) : "The Turkomans and Turkomania in the Travels of Bertrandon de la Broquière" [トルコニアの旅——ベルラン・ド・ラ・ブロクイエの旅行記]

ラチエヴィツ (カンベラ) : "Three manuscripts of the Mongol History of Jami' al-Tawârikh: With a special reference to the History of Tribes" [『蒙古史』の手稿本——部族篇]

バジン (サンマール) : "Le nom du chameau dans l'aire turco-mongole: Essai d'étymologie" [トルコ・モンゴル語圏の馬の名前——語源論]

Mongols in Asia and Europe: A reappraisal" [東洋とヨーロッパのモンゴル族——再検証]

Bazin, Louis (Saint-Maur): "Le nom du chameau dans l'aire turco-mongole: Essai d'étymologie" [トルコ・モンゴル語圏の馬の名前——語源論]

ンガル語地域における駱駝の名称——語源は「カーミー」午後は再び遠足として、バスでシャンティイのシャムを訪れた。この美しいシャムは十六世紀に始めて建てられ、十七世紀の将軍アンギアノ公ルイ一世「大コノト」が隠棲の地としたもので、美術品の蒐集はハラスベではルーグルに次ぐ質と量を誇る。リシャール会長のおかげで、一行は貴重な写本や刊本をおびただしく納めた図書室まで案内を受けることができた。

遠足から帰つて、最後の第六セッションがあつた。

第六セッション「言語・文學」司令 ベルベト・ケルナ
ー=バイハケン (Barbara Kellner-Heinkele)

Solntsev, Vadim M. (Moskva): "Genitive in Mongolian and Southeast Asian languages" 「サハクハ語の東南アジアト語語における所有格」

Gorelova, Lilya M. (Moskva): "The Manchu tribe Sibe among other peoples of Sinkiang: From a point of view of linguistics" 「新疆の諸民族の體のハグ語系族——即墨族の語彙など」

Unterbeck, Barbara (Berlin): "On the multiple functions of the Manchu plural suffix -ri, -si, -ta / -te / -to and -sa / -se / -so" 「獨秀語の複数接尾辞の多機能性について」

Antonova, Elena (Elista): "Étymologie du nom Kal-

myk" 「カルマックの名の語源」

Vandamme, Marc & Braam, Hantsje (Utrecht): "Types, polynomes and collocations" 「類型、多項式、連語」 Even, Marie-Dominique & Shagdarsüüring, Tseveelin (Nanterre): "Jeux de mots mongols" 「サハクハ語の諺遊」

遊び

Han, Sherman 韓ス韓 (Hawaii): "Poems by Akdyn on his journeys to Mongolia and Xinjiang" 「サハクハ・新疆旅行による蒙古の詩」

Mollova, Mefkûre (Épinay sur Seine): "Autour de la première lacune dans Baburname" 「ターバトル・ナーメ」

最初の原文脱落をめぐる
いれやすべての研究発表を終ねて、夕食後、再び講堂

へ経営 (Business meeting) がおひだ。本年度のインバウンド

アト大学アヘタハイ学賞 (Indiana University Award for Altaic Studies' 通称 PIAC Gold Medal) が、ニッキー・ハミルトン会長からハーマン・ハーマン (James Hamilton) に授与された。続いて来年度の同賞の受賞者選考委員の選挙が、過去三回以上参加のPIACメンバーの投票によって行なれ、バイナル・シャールキヤハ・ケルナー=ハインケルの名が当選した。来年度の受賞者は、この二名の委員

と、会長、書記長の合議によつて決定された。

サイナー書記長の指名により、岡田英弘が登壇して、一九九五年の第三十八回会議を日本に招待することを提案し、これが拍手をもつて迎えられて、岡田の第三十八代会長就任が決定した。サイナーは特に、岡田は参加十二回、妻の官職も参加九回の古参会員であり、来年の会議は伝統を守ったPIACらしいものになることと信じて喜んでいたと発言した。岡田新会長は、第三十八回会議を一九九五年八月七日（月）に始まる週に開催すること、某大銀行が川崎市に所有する研修センターを会場としてすでに確保したことなどを発表した。会議の開催を正式に声明する第一次回状（Circular）は、インディアナ大学にあるPIAC書記局から一九九四年十一月に発送される。

かくしてすべての行事を終わり、翌二十四日（金）の朝食後、日本における再会を約しつつ散会した。

国際アルタイ学会の日本開催は、早くからの懸案であり、毎年の会議では、来年こそ日本だろうとの噂が流れるのが常であった。岡田は、一九八六年八月、当時まだソ連のウズベク共和国だったタシケントで開かれた第二十九回国会議において、サイナー書記長に日本開催をはじめて申し入れ、大いに喜ばれた。その後種々の事情に因つて、実現が延び延びになつてゐたが、このたびようやく機が熟し

て、九年ぶりに実現の運びとなつたものである。
常設国際アルタイ学会は、冷戦下の一九五八年に当時の西ドイツにおいて創立されてから、毎夏かかさず持ち回りで開催され、鉄のカーテンの東西の中央ユーラシア研究者たちに、ほとんど唯一の共通の場を提供してきた。ソ連の滅亡とともに中央ユーラシア研究の黄金時代が到来した今日、このような長い輝かしい歴史があり、かつ今なお新しい世代の参加が多く、活気のある国際学会が日本で開催されることは、学会にとっても、日本にとっても、まことに意義が大きいと言うべきである。